

『洛中洛外首狩り目録』

錦 織 葉 子

心を以って殺すは人の業。

心無くして殺すは獣の業。

理を喰らうて殺すは鬼の業。

あきあかねが夏を攫いに出て来て少しばかり。陽の光と水とむせかえるような青葉の香りは薄れてきて、盆地であるこの都から蒸し暑さが消えるのはもう幾日かかかるであろうそんな時分。日本三大祭の一つである祇園祭が数日前に終了したにも関わらず、未だに多くの観光客で街は賑わっている。しかし、人通りの

多い道から一本外れば、そのような喧騒も気に触るほどではない。

そんな京の小道、先斗町。三条通りから一筋南に下った石屋町、そこから鴨川に沿って、橋下町、材木町、若松町、梅之木町、下樵木町、鍋屋町を縫うように南北にわたる細い通り。祇園甲部や宮川町と並ぶ、五花街の一つである。

紅殻格子の家屋が軒を連ねるその閑静な通りを、足早に歩を進める男がいた。

残暑厳しいこの日和に全身黒のスーツで固め、グレーのカラーレンズのサングラスの奥は鋭い目つきをしている。筋骨隆々なその体躯は、ただでさえ窮屈な道をよりいっそう細く見せていた。無精ひげを生やした口元は苛立たし気に引き結ばれている。

その足が一軒の家で止まる。家といっても民家ではない。引き

戸の横にはまだ灯がともっていない提灯と、「たか乃」と書かれた掛行燈があった。

所謂、お茶屋である。

「おこしやす、^{やすくて}泰外はん。旦那はんならいつもの部屋に居てはりますよ」

「おう」

玄関をくぐると年嵩の女将に迎えられた。店を開ける前にも関わらず、急に押しかけて来た巨軀の男に物おじせず対応する。この店、というかこの旦那衆馴染みの店にとつては日常茶飯事なのだろ。

短く答えた男、泰外は急いだ様子で靴を脱ぎ、少々傾斜がきつい木造の階段を上がって行く。登り切ったその足で迷うことなく最奥の部屋に進んだ。

勢いそのまま襖をばあんと開ける。

「坊、お迎えに上がりました」

泰外がかけた声の先。坊と呼ばれた男は、名の通り、小坊主よろしく芸妓の膝に頭をあずけてすうすうと寝息を立てている。ぴきり、と泰外のこめかみに青筋が立つ。

怒りの矛先、寝顔はあどけないが二十代後半にみえる男。長く

滑らかな烏羽色の髪を芸妓の指でなでられている。値が張りそうな濃紺のピンストライプのスーツは寝転がっているため少し着崩れていた。銀縁の眼鏡をひっかけた手は畳の上に投げている。芸妓が軽く会釈をしたところで店に怒号が響いた。

「さつさと起きねえかこの糞餓鬼があ！」

音波というか熱波。築百年を超える小さな木造建築をびりびりと震えさせる。着物が吹き飛ぶほどの音量で発せられた怒鳴り声でも涼し気な顔をしている芸妓が、件の男の背をぼんぼんと叩いた。

「^{ほんま}嵐北はん。目え覚ましておくれやす」

そこで初めて、男は寝息を乱した。眠たげに目をこすりながら、ゆつくりと体を起こす。

「なんや久春ちゃん。もう一時間経ってしもうたん？ ……あら？」

眼鏡をかけ直し、部屋の入口の前に仁王立ちしている泰外を見る。背中から怒りの炎がほとばしる姿は仁王というよりも不動明王だ。

「嵐北の坊、虎井泰外が、お迎えに、上がりました」

引き鑿るように口の端を歪めている泰外が、一言一言区切るように再度言った。しかし、そんな怒気はどこ吹く風と、嵐北は朗

らかな笑みで返した。

「苦勞さん、虎の字。ようここがわかつたなあ、感心感心」

「ええ、ここに来るまで三十六軒外してきましたから」

「なんや、と今度は畳の上にごろりと転がって足を組んだ。

「ようやく虎の字の追跡が僕のサボリスキルに追い付いてきた思
うたのに。まだまだやんかあ」

「坊が仕事サボるのをやめれば済む話です。そろそろ幹部会くら
いは予定通り出てください。というか、坊が本気を出せば俺なん
かには見つけられないんですから、隠れたいんだか見つけたい
んだかはつきりしていただきたいです」

「はい」

生返事なのもこの男にとってはいつものことだ。女性を扱う時
の細やかな心配りを少しでもこちらに分けて欲しいという言葉をも
泰外は飲み込む。溜息をつく泰外に、嵐北は足を組み直して言った。
「ほんで、虎の字。今日も菱見さんのお食事会サボった僕を叱
りにわざわざ来てくれたんか？」

「いえ、その会合はキャンセルになりました」

嵐北はぐいと体を起こした。片方の眉を吊り上げて泰外を見る。

「キャンセルして、僕がおらんから虎の字が取りやめたんやない
の？」

「いいえ、あちら側から、と言いますか」

一つ、息をついて言葉を切った。

「〈本家〉から、緊急幹部会の連絡が入ったため、中止となりま
した」

坊、と泰外が低く唸るように続けて言った。

「洛朝会直系組織の組長三人が、今朝未明、死体で発見されまし
た」

己が望んだ結果だった。

憎くてたまらなかった。

しかしそれが欲しくてたまらなかった。

手に残るぬめりは何年経ても消えず、

最後に見たその顔は、何度記憶を辿っても思い出すことは出来
ずにいた。

月が照らす青白い廊下を、式条嵐北は一人歩いてゆく。張り詰

めたような緊張が充滿する空気に対してか、いつ来ても時代遅れの厳格さが漂う建物に対してか、ほのかな苛立ちが含まれたため息が漏れる。ポケットハンドのまま、緩慢な足取りで薄暗い奥座敷へと歩を進める。

「式条染吉之丞そめよしのおすけ嵐北参りました」

開かれた襖の前で足をたたみ、こぶしを床につけてわずかに俯く。瞬間、刺すような視線が一斉に嵐北に向けられた。それらを受け、俯いたままわずかに吹き出す。何が愉快なのか、もしくは不愉快なのか、自分でも理解ができないまま。

「お早いお着ぎで、式条はん」

幹部らが整列する大広間の入り口近く、末席に正座する男の声に嵐北は面を上げる。ざり、と畳が擦り切れる音が耳に障る。

「坊やはいつも時間も時間を持て余しはって……、余裕があつてよろしおすなあ」

男は口元を引き皺らせて笑う。幹部会のたびに毎度毎度浴びせられる小言も、最近は何んだか面白く聞こえてくる。

「へえ、確かに。毎月のあがりも上手いこといつてへんそちらはんに比べたら、時間を浪費してもうてますねえ。やることも特にあらへんよって、堪忍な」

男の顔がざしりと歪む。それを見て唇だけで笑うと、嵐北は上

座へと移った。

下座の方で囁く声が聞こえる。

式条のせがれだから。

小僧の分際で。

まったく飽きもせずによく舌が回るものだ。そのくせしのぎのことも上手くできないとは本当に笑えてくる。

（あれ）もこんな連中のお守りに追われていたのだろうか。

「集まったな」

凜とした声が低く座敷に響く。列席する幹部たちが一斉に声の主に頭を垂れた。

五十を超える洛鞆会直系幹部の列を見下ろしながら歩き、座敷の最奥に坐す。

京都洛鞆会、四十三という若さでその頂点に君臨する人間。

象牙色の着物に、薄い鶯色の羽織を纏っている。年の割には白髪が目立つ髪を丁寧に撫で付けている、穏やかな顔つきの男。

二十四代目会長、薙創市郎なきすけいちろうである。

「急な呼び出しですまなかつた。事が事なものでね」

誰一人言葉を発さずとも、大広間の空気がざらりと激む。怒りと不安感、そして誰かの何者かへ向けた殺意が満ちる。式条嵐北は眉一つ動かさない。

そんな陰鬱とした空気を纏う部下たちへ、薙は穏やかに言った。

「そんなに鬱々とするものじゃない、逸るものでもないさ。万事、腰を据えて取り掛かろう」

すと目を細めて薙は続ける。抜き身の刀のような鋭さを含んでいた。

「ではまず、今のところわかっている事件の詳細を話そうか」

蘇我組組長、蘇我一馬。

武天会会長、天野大樹。

足利組組長、足利尊。

以上三名の死体が今朝、京都市内で発見された。死体の痕跡から、全員射殺と判断されている。殺された場所は様々で、事務所の中で殺された者、自宅で殺された者、移動中に襲撃された者と三者三様だった。外部観察組織・八ッ目組からの報告によると、周辺の他の組織の動きに変化は無く、また洛朝会の領地に行した形跡も無いとのことだった。洛朝会と交流のあり、互いにシマを行き来している外部の組にも目立った行動は無かった。

よって、犯人及び犯行動機は不明である。

「……ということろだ。今のところ内部犯なのか外部犯なのかわからない。両方の可能性を加味した上で調べてほしい」

幹部たちが驚愕に揺れる。

外部犯ならまだしも、内部犯。

つまり、この座敷にいる者の中に犯人がいる可能性があることを、他ならぬ洛朝会会長が口にしたのである。考えうる最悪の展開が、すぐそこに口を開けて待っている。

周辺組織の犯行である方が何倍もマシだった。

もし内部犯だった場合これより先、同じ組織の中で、自らの組織形態や兵力、行動範囲までを熟知し合っている人間たちで、互いに喰い合わなければならなくなるからだ。

「う、内海双連の奴らは何をしているんです！ こういう事態にこそ役に立たねばならない連中でしょう！」

「そうだ！ 内部監査組織などと姑息な連中が直系に居座っているのも、こういった不測の事態のためだろうが！」

幹部の一人が声を荒げた。近くに座る数人の直系組長たちも同調する。

非難するように、懇願するように叫ぶ。

「……内海とは唯一、否次ともに連絡が取れていない。つまり、内海双連は現在全く機能していないと言っている。どちらとも言えないと言ったのは、そのせいだ」

怒号を上げていた男がすとんとその場に沈む。それ以上、口を

扱む者はいなかった。普段は邪険にしているくせに、こういう時だけあてにする幹部たちの調子の良さにまたしても笑いがこみ上げる。

「内海については引き続き連絡を試みる。各位、内海や殺された三人について何かわかったら逐一俺に報告してほしい。やり方はまかせろ」

薙は座敷を見渡しながら言う。

「今日はご苦労だった」

そのまま、会合はそこで閉じられた。

幹部会が終わわり、集まっていた幹部たちが次々と散って行く。

ある者は逃げるように、ある者は勇むように。ある者は何かを欲しがるように。

そんな様子を式条風北はほんやりと見つめていた。

「風北」

足が痺れてきたので帰ろうとそろりと立ち上がった時、同じように幹部たちが出て行くのを眺めていた薙創市郎に声をかけられた。

「なんやイチ兄」

「いや、よく来てくれたなと思ってね。いつもの通り、お前はサ

ボるんじゃないかと思つていたよ」

くすくすと笑う物腰の柔らかな男。こんな状況にあつても雅やかな様子は、さすが組織のトップといったところか。

「緊急やつて言われたらそれ僕でも顔くらい出しますよ。ただ、話聞く限り殺された三人とも内海とも大して交流は無いら、役に立つか言われたら微妙やけど」

「ちゃんと話も聞いていたのか、偉いぞ風北」

少々驚いた顔をしながらおもむろに風北の髪をかき混ぜる。全く、この男の自分に対する甘やかしは相変わらず尋常ではないと、溜息をついた。

「イチ兄、それいい加減やめてくれへんかな。僕、イチ兄のせいであらん妬みも買うてるんやけど」

つい先程言われた小言を思い出す。他人にどう思われようが知ったことではないが、あれらと同じ組織に属していると思うと何だか情けなくなってくる。

「いいじゃないか別に。ついつい猫可愛がりしたくなるんだよ」

——それに、

「あの人の息子なら尚更だ」

ばん、という音が誰もいない座敷に鈍く響いた。手加減もなく、反射的に払った薙の右腕は退けられた姿勢のまま静止している。

「それもいい加減やめてくれへんか」

半ば恫喝するように低く嵐北は吐き捨てる。薙は一瞬戸惑うような表情を見せたが、すぐにいつもの人の良さそうな笑顔に戻った。心なしか、嬉しそうにも見える。

「ごめんごめん、今のは無しで。とにかく、俺は嵐北を大事にしてるってことだよ。他の誰よりも、ね」

「そらありがたいけど、わざわざ僕を撫でるために呼び止めたんかイチ兄。それこそ猫やないねんで、僕」

いや、呼んでもそのまま撫でさせてくれるかはその個体次第か、とどうでもいい方向に思考が飛ぶ。まあ、式条嵐北は犬も猫も飼ったことがないので詳しい生態は全くわからないのだが。

と、そこで薙の言葉が嵐北の意識を引き戻す。
「いや、実は嵐北に折り入って頼みがあつてね」

思いもよらなかつたその言葉に首を傾げる。嵐北は目線を右に外してからもう一度薙を見た。

「頼み？ イチ兄が？ 僕に？」

珍しいこともあるもんやねえ、と若干嫌な予感がしつつも、嵐北は内容を聞く前に断るようなことはしなかつた。

「連絡が取れないといった内海双連の、内海唯一の方の事務所に行つて来てほしいんだ」

嵐北の表情がさらに訝し気なものになる。勿論、内容を理解していないとかそういうものではない。

「イチ兄、せやから僕内海とは何の付き合いもないねんで。もつと他に、」

「内海と深い交流のある組織など存在しないよ。あれは、そういう風に出来ているからね、わかっているだろう？」

この男が人が話している最中に割つて入ることは極めて珍しかった。それだけで有無を言わさぬものがあつた。嵐北ははやくも先程の判断を後悔する。

「……わかつた。せやけど、なんで僕に頼むんか理由くらい聞かせてもろてもええやろ」

「ああ、それは単に他が内海双連に関わるのにビビってるからだよ。みんな、内部監査組織なんておつかない連中に触れるのは嫌だからね。でも嵐北なら問題ないし、取られる揚げ足もないだろう？」

「……僕もできれば関わりたくないんやけど」

「それじゃあよろしく頼むよ」

薙創市郎は笑顔で踵を返し、大広間から去っていった。

かくして式条嵐北は好むと好まざるとに関わらず、いつの間にか会長である薙創市郎の頼み事をきくことになっていたのである。

洛朝会直系、内部監査組織内海双連。

読んで字の如く、洛朝会内部の組織、直系から五次団体に至るまでを観察し、検閲し、時に糾弾する組織である。

代々内海家に必ず生まれる双子が総督を務め、その長男と次男は別々の組織を率いる。

長男が次男を、次男が長男を互いに監視し合う。

同じ内海双連だが、二つの部隊に分かれてこれまでの洛朝会の治安を保ってきた。

ゆえに、独立部隊であり、不干渉の組織である。

式条嵐北は現在、その長男が事務所を構える烏丸通りに向かっている。運転手を務める虎井泰外に時々愚痴をこぼしながら。

「坊、日頃から会長には無理を聞いていただいているのです。これくらいの頼み事は快く請け負って差し上げるべきだと思います」

「せやけど単に面倒事押し付けられた気がすんねん。ほんまにあの人僕の事大切にしてくれとるんか?」

後部座席のシートにもたれ掛りながら、今日何度目かの台詞を吐く。組んだ足の先で、軽く前の泰外の座席を蹴った。

「そう思っているのは坊だけです、全く。いくら会長が(先代)の弟分だったからといって、普通はこんなに目をかけていただけないのですよ」

後部座席の空気が一気に悪くなるのを泰外は背中を感じる。し

かし、こういう方向に話を持っていかない限り目的地に着くまで延々と文句を聞かされると思い、多少の罪悪感を覚えながらも続けた。

「それに、会長はよく仰っていますよ、坊は実の息子のようだ、と」

後ろの殺気にも似た激情が急速にしぼんでいく。とんとん、と緩く返事をするように、また席の後ろを蹴られた。

「……息子、なあ」

窓の外に目を移す。

抜けるような青空、天上に向かって幾重にも雲が渦巻いている。

龍のようだ、とぼんやり考えた。

——僕はランくんのが大好きやで。例えば、ランくんが僕のこと大嫌いでもなあ。

不愉快な声が頭に響く。奥歯がぎしりと鳴った。

十何年間、(あれ)がよく口にしていた戯言だ。

人を喰ったような性格の男が、人の人生を喰い散らかして生きていた男が、どの口でほざくか。

「……阿保やわ、ほんまに」

「坊? 何か仰いましたか」

ハンドルを握る泰外が何やら不安げに問いかけて来た。何でも無い、と素つ気なく返すとさらに不安そうな顔をする。生真面目なこの男のことだ、少々言い過ぎてしまったと気にしなくとも良いことで勝手に責任を感じているのだろう。全く、自分を甘やかす人間が周りに多すぎる。知らずに喉の奥から笑いが漏れ出した。

「……何笑つてんだてめえ」

地を這うような声と共に、先程とは打つて変わつて怒気を含んだ顔がミラー越しに睨み付けて来た。それを見て今度こそ嵐北は笑い声を上げる。

「つたくしおらしくなつたと思つたらすぐこれだ。むこう二週間は事務所に閉じこめて嫌でも書類仕事やつてもらうからな」

「え、それはほんまに嫌やつて！ 虎の字がやつたほうが効率ええし僕がやる必要あらへんもん！」

「効率の問題じゃねえ。仕置きだからな」

「反省しますー！ せやからやめてえな！」

「揺らすな馬鹿野郎！ 交差点のど真ん中でクラッシュしてもいいのかー！」

「ええよ別に、死ぬん虎の字だけやもん」

「……急に真顔になるなよ、怖えだろうが」

顔に似合わず、というか従者よろしく懇切丁寧な運転で内海双連の事務所に着いたのは、そんな問答の十分後だった。事務所とはいうものの、見た目はごく普通の小綺麗なオフィスビルである。見事に擬態していると言つていい。

「いや、今時それらしい事務所のが珍しいわ」

「坊、誰に向かつて言つているのですか」

無視してロビーへと歩を進めた。広々とした灰色の空間が広がっている。黒革張りのソファがぼつぼつとあるが、腰かけているものはいない。奥にある二つのエレベーターも稼働してはいるが、出てくる人間はいなかった。二人分の足音が嫌に寒々しい。このビルは六階まであるうちの、上三階分のフロアが内海双連のものとなつている。残りのフロアもテナントが入つていたはずなのだが、人の気配がしない。

「……やけに静かですね」

「元からこんなもんなのかも知れんけどなあ。せやけど、確かに嫌な感じや」

言つて、エレベーターのボタンを押す。

トップ二人が行方知れずだというのに、実働している構成員が増えた気配もない。そもそもが隠密部隊なのだから増援が目に見えないということもないのだが、不自然なほど落ち着いている。も

しやとも思つたが、血の臭いはない。

そこまで考えて、六階にいたらしい本体が静かに降りてきた。

機械的な音と共に開いたそれには、二人の少年が乗っていた。

おそらく小学校高学年くらいだろう。一人は利発そうな顔立ちで少し驚いた顔をしている。もう一人は片割れに半ば隠れるようにこちらを見ている。何やら大切そうに大きめの紙袋を抱えていた。

同じ髪型、同じボロシャツに同じジーンズ、靴だけは違っている。二人というよりは、元々一人だったものが二つに分かれたのではないかと思うほど、そっくりな二人だった。

「……………」

たつぷりと思考が停止して、十秒。片方の少年が口を開いた。

「……忒条、嵐北さまと、虎井泰外、さま、ですか？ このよう

なところにわざわざお越しいただくとは……、恐悦至極……で、

ございます」

緊張と驚愕と慇懃無礼が混ざり合つた、何とも場違いな挨拶だった。見た目以上にこの少年も驚いているらしい。

仰々しく頭を下げる手前の少年に倣つて、後ろの少年もぺこりと下を向く。

「お初にお目にかかります、わたくし、内海双連総督の一人であ

る内海唯一の長子、内海はじめと申します」

心なしか引き攀つた微笑みを浮かべながら利発そうな少年、はじめはそう名乗つた。後ろに立つ恐らく弟であろう少年に、ほらと声をかける。

「つなぎです……あの、内海のおうちの次男です……、よろしくお願ひします」

二人分の挨拶を受けてもなお、忒条嵐北は邂逅の態勢からびくりとも動かなかつた。動かないというよりは、単純にどう反応したら良いかわからないのだろう。

親代わりともいえる人物から依頼され、事務所を訪れたら件の男の息子二人に偶然会つたから反応に困っているのではない。

忒条嵐北は子どもとの接し方がよくわからないのである。

「ご挨拶が遅れてしまい申し訳ございません。改めまして、忒条組若頭兼組内虎井組組長の虎井泰外と申します。お初にお目にかかります、内海はじめ様、内海つなぎ様。自分のことまでご存知とは、こちらこそ恐縮でございます。どうぞよろしくお願ひいたします」

フリーズしている主を尻目に先に泰外は名乗つた。礼儀として正しいとは言えないが、間が持たないという判断と、嵐北が再起動するまでの時間稼ぎのつもりなのだろう。

泰外に移っていた内海兄弟の視線が再び嵐北に戻る。

「……忒条嵐北や。あー、うん、今度ともご虫真に」

時間をかけたわりに成人男性とは思えないような適当極まりない挨拶で返した。背後で泰外の額の血管がびきりと音を立てたような気がする。しかしその適当さが気に入ったのかはたまたま珍しかったのか、内海はじめが微かに表情を和らげた。

「それにしても、嵐北さまと泰外さまは一体何用でおいでくださったのでしょうか。我々のような下級組織の事務所に忒条家のご当主が直々に足をお運びくださるとは、誠に恐れ多く……」

「謙遜し過ぎや、そないに大した用やないしな。イチ兄……雍会長に頼まれて内海の様子見に来ただけやから」

それはそれは、とはじめは大仰に両手を広げる。その言動にわざとらしさが無い分、子供らしさも全く無い。後ろに控えるつなぎが年相応に振る舞っているため、余計にそう見えた。どうも兄の方には教育が行き届き過ぎているらしい。

「会長さまにもご心配をおかけしてしまっているとは……面目次第もございません。しかし申し訳ないことに、わたくしも父と連絡をとることができません。先程も父に会う為に事務所を訪れたのですが……、門前払いされてしまいました」

「なんやとっ」

嵐北が片方の眉を上げる。

「内海の息子やろ、組のもん顔知らへんのか?」

「わたくし共も事務所に来たことは以前に一度しかなかった……、名前を言う前に追い払われてしまいましたし……弁明する暇もなかったのです」

次第に小さくなる声と共にはじめはしんなりと俯く。訝し気な表情を浮かべたまま、嵐北は後ろに立つ泰外と顔を見合わせる。

見知った構成員がたまたま出払っているのだろうか。それにして、明らかに意思を持って訪れただろう子供二人を事情も聴かずに追い返すことがあるだろうか。人通りの多い場所とはいえ、オフィスビルの上階に小学生が迷い込むことなどまずない。

間違いない内海の関係者だと察するはずである。それにも関わらず全く相手にしないと、余程何人たりとも事務所内に入れたくない、もしくは周辺をうろついてほしくない理由があるのだろうか。

と、そこまで思考して目の前の項垂れる双子に視線を落とす。そこにいたのは大人顔負けの口調で話す内海双連総督の実子であるところの長男ではなく、何か大事な用事があった父親に会うことができずに悲しみに暮れるただの幼い男の子だった。

そんな様子の二人を見て、白旗を振る代わりに溜息をついた。

「そんなら一緒に行つたらええわ。僕らも唯一はんに会わなあかんからな」

「ほ、本当ですか！ ……あ、いえ、しかし……」

救い主を見るような目で嵐北を見上げるはじめとつなぎであったが、即座にためらいの表情を見せた。

「ええから。ほら、置いてくでー」

未だ逡巡している双子の横を通り過ぎ、エレベーターに乗り込む。ちよいちよいと指先で招くと、観念したようにおとなしくついて来た。エレベーターの操作係はまんまと双子に取られてしまったが。

浮遊感が消え去ると同時に、最上階の六階に到着した。

微かに人の気配はするが、一階と同じく物音一つしない。

「なあ、はじめ。内海の事務所はいつもこないに静かなん？」

「？ ……ええ、基本的に組員は外におりますので。事務所の中にいるのは事務処理をする組員数人のため、騒がしいことはないかと存じます」

「……そうか」

答えてから受け付けへと進む。案の定、誰もいなかった。

「おや、先程は一人いたのですが……、わたくしがお呼びいたしま、ま、」

「すんまへーん！ ……どなたはんかいーひんのですかーん？」

明らかに必要以上の大きさで声を撒き散らす。飛び上がりそうなほど驚くつなぎが視界の端に映り、少しの罪悪感を覚える。

がたり、と最奥の部屋から音が聞こえた。

「お疲れ様です、式条組長、虎井組長。今日は私共にとどのような御用でしょうか」

程なくして、冷たい表情の構成員が顔を出した。その目にははじめもつなぎも映ってはいないようだった。

「僕らより先に挨拶する相手がおるんやない？ この子ら、唯一はんとこの子おやねんけど」

口の端だけで笑いながら、嵐北は目の前の男に言う。男は、ぎょろりと目玉を動かして双子を見下ろした。

「お疲れ様です、若。申し訳ございませんが、親父でしたら不在でございます」

それは本当に機械的な言葉だった。暗に帰れと言っているようなものである。その何とも言えないオートマチックな様が内海双連の構成員らしいと言えば、これ以上ないくらいらしいのだが。

「二人は俺の付き添いや。社会科見学したい言うから連れて来たんやけど、あかんか？」

言つてはじめてつなぎを軽く引き寄せる。目線は正面の男を一分の隙も無く縫い留めたまま、欠片も笑つてはいない。

嵐北の言葉に一瞬男の顔が歪む。しかしすぐに鉄仮面に戻つた。

「いいえ。でしたらご案内させていただきます」

男が右腕を軽く上げて先導しようとする。それを嵐北は制した。

「いやええよ、僕ら勝手に事務所ん中うろついとるから。なんかあつたら呼ぶよつて」

「お待ちください」

「会長命令なんやけどなあ、聞かれへんのか？」

その言葉に男の動きがびたりと止まる。脳に命令された四肢の如く、即座に行動を停止した。

「……………、了解しました。何かございましたら、お声がけください」

それだけ言つて男はさつさと下がつて行つてしまった。嵐北は男の姿が消えるまでそれを目で追つていた。

「……坊、会長から内海の事務所を好きにしていいと本当に言われたのですか」

「嘘に決まつてるやん。せやけど内海の事務所見て来いとは言われたんやからええやろ。あとでどうなろうと、僕の責任やあらしまへん」

深く溜息を吐き出す泰外は意に介さず、嵐北は先程の男とのやり取りを静観していた双子を振り返る。自分の領地でありながらも口を挟むことが叶わなかつたはじめは、少々悔しそうに口を引き結んでいた。

「ほんならここからは二人に案内してもらおか、よろしゅうな」

「は、はい！ お任せください」

仕事を与えた瞬間、はじめの表情がきらきらと輝いた。未だに辺りをきよろきよと見回す弟の手を取り、絨毯の敷かれた廊下を喜々として歩く。

軍隊教育のようなものを施されながらも人間味は失っていないようである。内海家に生まれる双子はある程度の年齢になると離れ離れに暮らし、将来内海双連総督の座を継ぐために必要な訓練を受けなければならなくなると聞いたが、二人はまだその期間には入っていないようだった。

唯一と否次の兄弟関係は詳しくは知らないが、数年後にはこの双子もお互いに監視し合う生活を送らなければならないと考える胸が痛む。

洛朝会の機能として、機関として、人間らしい感情を削り取られたまま歯車として生き続ける人生を、目の前の無邪気な少年たちも歩まなければいけないのか。

せつかく兄弟がいるのだから、せつかく父がいるのだから、せつかく家族がいるのだから。

別れるその日まで、共にいればよいものを。

「坊、内海の御家の問題です。これまで何百年と続いてきた風習に、今更他所の家の者が口を出すべきではないと存じます」

右後ろを歩く泰外が、双子には聞こえない声量でそう論ず。

「なんや虎の字、エスパー？」

「てめえの今の顔見りや簡単にわかるんだよ、馬鹿野郎が」

はて、自分はそんなに情けない顔をしていたのだろうか。わからないが、苦々し氣に言い放つ泰外の様子から、少なくとも彼が危惧の念を抱くほどにはよろしくない顔色だったのだろう。

「まあ、てめえの考えもわかるけどよ。……それは、口に出していいもんじゃねえ」

人道的にどうであろうが、内海の家に脈々と受け継がれている立派な伝統である。少なくとも、本人たちはそう思っている。故に、余所者がそれを否定するということは彼らの存在自体を否定していることにもなる。彼ら自身を、侮辱していることになる。

彼らの父を、侮辱していることになる。

「……わかつとる、わかつとるよ」

いつかこの二人に自分たちの家を呪うような瞬間が訪れるかも

しれない。否、その感情さえ無かったことにされるのかもしれない。どちらにせよ、必ずやつてくるその瞬間、組織の一部として死んでいく父を見た時に、組織の感覚器として摩耗し、果てていく父を見た時に、この子供たちは何を感じるのだろうか。

そんなことを考えながら、はじめが紹介していく事務所の中の部屋や施設を検分していく。一つ一つ丁寧に説明してくれる分、目ぼしい手がかりが無いとなんだか逆に申し訳なくなってくる。そもそも事務所の中に何かあれば組員が発見しているだろうし、このビル内を散策する意味があるのかと聞かれるとどう答えていいのかわからないのだが。

まあ、見て来いと言われたんやし、何も見つからんでもええんやけど。

はじめとつなぎの足が最奥の部屋の前で止まる。くると同時に振り向き、ドアの両脇に立つ姿は小さな門番のようだった。

「嵐北さま、ここが最後の部屋でございます。内海総督である父の自室、そして書庫となっております」

全体的に簡素な雰囲気事務所にそぐわない豪華な造りの扉を開ける。

細やかな装飾が施された木製のローテーブルと革張りのソファ。壁は全面本棚となっており、新しめの洋書から古めかしい和綴じ

の書物まで、様々なジャンルや年代の本で埋まっている。その一角にいかにも頑丈そうな金属製の扉があった。書庫というかもはや金庫である。ダイヤルが二つ並んでおり、小振りだが銀行の金庫などで使われているような丸型ハンドルが設置されている。木彫の家具で整えてある部屋だけあつてかそれが異様に目を引く。申し訳程度に備えてある縦長の窓からはたくさんの人、そしてタクシーやバスが行き交う烏丸通りが見える。

部屋の奥に鎮座する机の主は今はいない。

「父は常に査察や会長からの命などで外出しておりますので、この部屋に居ることは稀です。そのドアの先は先程申しましたとおり、書庫となっております。内海双連がこれまで集めてきた重要機密が書かれた書類や書物などが積まれている部屋、と聞いています」

「ん？　なんや自分らはまだ入ったことないんか？」

「ええ、基本的に父しか入れない部屋です。嫡子とはいえ、わたくしたちが扉の暗証番号を父から教えてもらったのもつい最近のことです」

そう答えるはじめの表情は嬉しさ半分、不安半分といったものだった。自分たちが内海双連の総督としての第一歩を歩み始めたという自覚は確かに嬉しいものだろう。

だが同時に、父がいつ総督の座を降りても問題の無いように準備しているということ、実の父親が近々死ぬ可能性が高い状況にあるということ、どこかで感じ取っているのだろう。

「……せやったらここから先は、僕らは入れへんなあ。他んとこ見とるから、二人で行つておいで」

「いえ、お二方もどうぞ中へ。『武条家のご当主がいらっしゃった場合は書庫室へ入れてもよい』と、父から言付かっております」
嵐北と泰外が顔を思わず見合わせる。

はじめとつなぎは父からただ言われたからそう伝えているだけで、特に気にしてはいない様子だが。

これではまるで。

内海唯一は武条嵐北がここへ来ることを予知していたようではないか。

「では、開錠しますのでしばしお待ちください」

二つの小さな手が、かりかりとダイヤルを回す。

緊張した面持ちでハンドルを回し、力いっぱいそれを引く。

重厚な扉が開かれ、最初に感じたのは、

顔を歪めるほどの腐敗臭だった。

「……………お父さま……………」

中には、死体となった内海唯一が、膨大な量の書物とともに床

に置かれていた。

唯一の死体は、腹部と肩口を撃たれていた。

流れ出た血はすでに完全に乾いている。死因は出血死だと思われるが、それにしては書庫室の中にある血痕の量が少ない。しかし、この傷の具合から長距離の移動は不可能に思える。となれば、唯一はこの事務所内もしくは事務所周辺で負傷し、何者かにここまで運ばれたか、もしくは自らの部屋に閉じ籠ったかのどちらかだろう。

はじめの話から前者はまずありえない。この部屋を開けることが出来るのは内海家の当主だけのはずだからである。必然的に唯一が自らの書庫室に身を隠したといえる。

腐敗の度合い、そして血の濁き具合からして、殺されたのは昨日今日の話ではなさそうだ。

(……つまり……、蘇我、天野、足利が殺される前に、内海唯一は死んでいたことになる)

ならば、内海双連が機能していなかったが故にあの三人は殺されたことになるのだろうか。

だが、敵が誰であれ真つ先に内海を潰しに行くのは得策ではない。

内海双連総督は何らかの指令で事務所を留守にしていることが多い。その居場所が敵対組織は勿論、洛朝会の人間でさえ容易に知ることはできない。

しかし、事務所の中で殺されたということは、殺した人間は内海双連の動きをあらかじめ知っていたことになる。敵陣のど真ん中、いつ帰って来るかもわからない事務所の近くで待ち伏せしていたということはまずないだろう。それこそ悪手である。

そして何よりも——、
どき、と紙袋が床に落ちる音がした。

「……お父さま、……お父さま、お父さま、お父さま」

つなぎが、唯一のすぐそばに膝をついていた。

どろりとした唯一の目はその姿を映してはいない。

はじめはそれを黙って見ていた。

「お父さま、お父さま、お父さま、お父さま」

白く濁る唯一の頬に、ぼたぼたと涙が落ちる。

小さな手が、倒れる父親の汗と血で汚れた髪を何度も撫でる。

もう一人の子どもは、ぐしゃりと崩れてしまいそうほど強く拳を握りしめながら、それを黙って見ている。

「……ああお父さま、もうお別れしなければいけないのですね」
武条嵐北の視界にノイズが走る。

この光景を知っている。

すでにこの世にいない父に、縋り付くように涙を流す子どもを知っている。その涙を必死に殺しながら、何でもないようなふりをしてる子どもを知っている。

知り過ぎてるほどに知っている。

——ほなまたな、ランくん。

——嵐北、今日は二人でお出かけしましょう。

——……、要らんよ、……（あれ）が持つとつたもんなんぞ、

僕は要らん。

様々な声がこだまする。

頭の中を、記憶の底を掻き回す。

ぐらりと世界が歪んでいる。

「坊！ しっかりしねえか！」

大きな手に肩を痛いほど掴まれる。聞きなれたその怒鳴り声に、一気に意識が引き戻される。怒りと確かな憂慮が含まれた泰外の目が覗き込んでいた。

「……平気やって、うるさごと」

「そうかよ、……来るぞ」

無数の足音が金属製の部屋に反射する。背後で豪華な扉が蹴破られる音を感じた。

ガチャガチャと、オートマチック拳銃の銃口五つがこちらを向く音がひどく耳に触る。

その中の三人が嵐北たちに突貫してきた。拳銃を持つ二人と、こちらに向かってくる三人、どちらに警戒すべきか一瞬迷った。二人はそれぞれ、嵐北と泰外に襲い掛かる。それらを迎撃した隙に、もう一人は一番近くにいたはじめの腕を乱暴に掴む。

男は、その小さな頭に無骨な銃口を突き付けた。

「……ら、嵐北さま」

震える声その名を呼ぶ。声の主を安心させるべく、まずはそちらに視線を合わせる。

そのあと、目の前で構える男を鋭く見据えながら嵐北は言った。

「……で？ あんたら一体全体どこのお人なん？」

銃を構える男たちは答ええない。

「唯一はんの居場所調べるついでに、子どもの名前くらい覚えはつたらよろしいやん。おかしいやない、自分とこの親父の息子の顔も名前も知らんなんて」

唯一の死体に向いていたつなぎの目線が嵐北に映る。その瞳は何を言っているのかわからないといったようだった。

「僕らの処置にしてもそうや。なにが『何か』ございましたら、や、何もなくても僕らに張り付いとるのが内海の仕事やろが」

男を見たまま嵐北は続ける。

「何よりも、唯一はんの死体を事務所の中に放置しとるんが気味悪いわ、どんな親不孝もんやねん。気づいたらんかつたなんてことはないわなあ、唯一はんの血の跡は書庫室の中にしかなかつた。誰かがあとでお掃除したということや」

仮に事務所の外で唯一が負傷したとしても、犯人がビルの中まで追つて来るとは考えにくい。そもそも、内海双連総督の居場所を特定できるような手練れなのだから、一撃で標的を殺しきれないような粗末な人間ではないだろう。

となれば唯一は事務所の中で襲撃されたということになる。

しかし、京都市の中心部であり、洛朝会の領土の中央で、直系組織の長が自らの居城の中で敵対組織に襲われることがあるのだろうか。

自宅ならまだしも、内海双連の事務所である。唯一がいるいないに関わらず、多数の構成員が常駐しているこの場所で、総督を殺し、その証拠を不完全ではあるものの隠滅することに成功している。

相当な実力者でも一人では不可能である。つまり敵は複数人、そしてそれらは唯一を殺し切っていると確信はあるものの、死体が手に入っていないが故に現場に張っていないなければならない。

内海双連の構成員になりすまして。

「まさか事務所ごと乗つとるなんてなあ。旦那はんら、えらい大胆やないの」

唯一を殺し、事務所を占拠し、死体の処理方法を模索していたところに偶然嵐北たちが訪れた。最初にはじめたちを追い帰したのは、秘中の秘である書庫室の鍵を開けられるとは思っていなかったからだろう。

「でもまだわからんことも仰山あるわ。なんで最初に内海を狙うたのか、どないして居場所を突き止めたのか、そもそもなんで洛朝会が狙われとるんか。教えてくれへんかなあ」

男たちは答ええない。

「せやろなあ、教えてくれへんわなあ。そんならしゃあないけど、体に聞かへんわあ。言いたなつたらすぐやめたげるよつて、いつでも言うてな」

嵐北の目が、どろりと音を立てるように、異質なものになる。

爛々と、しかし激んだ瞳が無機物のような男たちを捉える。

吊り上がった口から邪気を含んだ吐息が漏れ出していた。

機械のようだった男たちの表情が初めて崩れる。

畏怖のような、憎悪のような念だった。

異形の物を見ているような、異界の者を見ているような感覚

だった。

「み、見えないのか！ この子供を殺されたくなければ、」

はじめを拘束している男が声を上げ、銃口をさらに頭に押し当てて。はじめが思わず目をつぶった。

それが目に入っていないかのように、嵐北は嗤った。

「ほな、精々お気張りやす」

言うと同時に忒糸嵐北は動いた。

ずるりと這うような、潜り込むような動作ではじめを抱え込んだ男の拳銃を握る腕を右手で掴む。その隙にはじめを逃がすと、もう片方の手で男の二の腕を掴んだ。その肘関節に向かって嵐北は思い切り自らの膝を突き上げる。

男の悲鳴と共に関節が逆方向に曲がった。

骨と神経が破壊される音が部屋に響く。完治するかも疑わしい程の、完膚なきまでの破壊行為だった。

声を上げ続ける男の頭部を掴み、磨き上げられた床に叩きつける。男の声と動きはそこで止まった。

仲間の一人が再起不能になったところで我に返ったように、残りの男たちが発砲を始める。はじめとつなぎを抱えた泰外が机の裏に隠れたことを横目で確認する。

男二人の銃が同時に嵐北を捉える。嵐北を中点にして左右ほぼ

同じ距離の位置にいた男たちが引き金を引いた。

※本稿は作品冒頭を抜粋したものです。

(続く)

(二〇一七年度卒業)